

月日貝全

特 別
A5
6590
16



松濤菴主還曆賀

都喜以賀居

土佐赤岡 字多和陰連中編



序

夫人名艸虫乃第下之天地云云以法高
寺之經是紙淺得世之凡之何之魚之
百骸九竅より齒爪を髪を其作の其の
名を事て更し人々云所始一老云云
事何起曰車也如之者存于一也然
一々其云ふわらひし車好相巧く云説く

是より之と考述はの仁義才能
以て人乃用と勢をの体相お合して車
と舟を人といふを台ありし、其の
も聖主賢君其師と進ひ其書を述
言し以て之を導く事ありし、其
堂に今に近し、此野に、味中
秋友松清菴主人敏く其室ふへく
隣里郷堂乃童家と傳く

邦君より之を抽賞し年穀と賜り
官わる人おはす量字もやわらんやこ
遠厩の誕辰あり、かの今と智事事
今大いふ事あり、これのれを、
かみ事者と智ん事おはさし、
事わらう事、之の爲郷堂新と書
とら、又人能るを、
は夫、其席、又その端作と

と望む事あり辭なき義あり可更ふ何と
云ん只此一平乃厚徳と擧事杜撰
可説を説く程く其餘白と書出と云

弘化三乙巳也

髯漁使

活生



藤あまのそを藤ふけられ能く
とすむと名交ふ者うう白松法の舎
と藤藤の仙翁彼ゆのまをさす
仙翁藤平とをさすけか可藤とつひ
こ能能藤ととていすそ藤と
藤ん中こそ一平にお友ありとて大丹
雅なとていす老翁のつをさす
かりて松をがらみと述ゆ可

君の歌を拾ひてを午月日貝

七言
五故

千より唯ん字多乃漢松 鷺仙

葉小舟碧る鷺乃ね風もあきて 微髯

巾より歌をうちり重なる 如水

こ糸土好まぬ振うて秘をぬく 董行

操り巻をむ世乃本ころひ 午松

異の竹乃小葉少月のさし水さ 鳳洲

くくくくけり川鏡をぬく 其舟

ウ
おもしろくわらふをいささし
柳齋

流代とありと歌を見たり
空椿

おろ歌あはる魚一伊孫篇二三枚
如松

袋とあ方白ふ補あり古株
昇六

小大より準あてる将葉 盤
文志

疔瘰乃糸乃せね月出ふ
自若

さる結る酒の通ひと走るる
琴松

言津の言りたそく秋の月
是同

角舐りの内見投こむ封し物
 人みとて或す秋子うむ備
 やるれと相馬の内裡つとくさ
 せぬいふ河はり妙品
 咲せんと培ふま乃咲支度
 ぬらむいふれりうは柳橋
 好まきやとてまのあし引
 種播乃踏鞠也知あま
 心月
 桃英
 里伯
 崔仙
 欽古
 坐月
 紫芳
 和光
 可水

能くぬを流とがこれ政事
 牙子を叩道うまう入聲
 掃休あ撮んでわう若むい
 和まうと種く余子の稱揚
 こしくと書車川出り行叩迎
 穴出と梳きよりつて居ぬ
 淡るく鏡衣のぬかいくと
 助常る武者の義をえまら
 心月
 州志
 友之
 素風
 璞高
 松甫
 亀濤
 多樂

控く下流うらむ瀬は河も淵もあは 五禽

雨の日は疲し耕の鳥を 麦二

或所ある長乃月影を帯り 一止

岩子や草如ん然乃振舞 松二

言 會もみまはれおむ鳥影をてこ 梧鳳

梅穂任りて上るつらり 時笑

瑞垣とささる中分を二のこ程 以翠

こえいあさり歌あふ家 鳩 空翠

世傳の伝流に我子に云ふ一て 多能

香砂舟の舟を于飯の舟に 陰左

豆白の古着いさうの奴と解 異石

後帯の舟をて休めかく弱 可長

例跡その洞壺一清て吾み名 甫川

湯泉の利用を其う覺る 麩三

候名つも心そのまうぶらぶら 社榮

積りかす竹寺を浄米下 宇紅

月皎々花馥郁
 都老々世々
 吐花
 羽根まゝく花
 摺活や玉
 漱
 知還
 三才
 とも傳ふうまて
 入る孔雀の子
 蘭石
 記憶あはれ
 人々
 用
 かを
 土もぬくと細
 波をせし
 志賀の里
 緑山

名百韻一歌

帝上名詠 花極了之々 花と出

花あさうせ
 花下や友のそ
 れ
 吐花
 美をきや野
 幻の牛
 好居てを起
 鳳洲
 秋既う来
 うりと振く
 ばま
 りれ
 田村山、
 是同
 多お芽と踏
 穿り香や雨
 乃御
 可水
 酔うや休
 じ羽をを并
 一合勢
 和光
 禱の聲
 由カ来る
 喜如御
 ありふ
 鑑野
 宇椿
 櫻う酢
 の庵うきり
 春のま
 お
 堇紆

咲て新あまや月乃一帯を、 文志
予をわすれかてくさくさくか、 其舟
焚きて酒よりもとくや泊り時、 府 飛英
夕そらの空高く飛ぶ雲小、 里野里 欽古
娟きぬ不易乃色や松の葉、 昇六
たまの勢ありふ大塚小夜夜、 松二
辺より阿南陀羅経や表のせ、 飛濤
心吹やそ危あつぬ夕月夜、 磯高

り喜ぶこゝれく成り出葉屋か、 叶花
そびえ通し一帯の友あり白い多、 横風
空のまじりぬきてる歌ききり、 里伯
志の津しるまふ大し月の帯、 菜石
鳴や軽花ちる里かたきし記、 野市 如水
お料くるかかんちり心ひの糸、 葉若
りぬりちぬしるあう花か多、 麦二
水より新籬か他くや序立所、 峯養寺 友之

遊米あり酒さのそを花屠、松南
 和事風う弱心はむや鞠志る和長、午松
 案干ふんかろ寸浪四や枕和也、素風
 斜さ良咲種う色中樹う水、琴今松
 石曲突乃利那小海川以干か後善寺主一止
 遊さうう文と海の一をう那物部自若
 芋植うしやさうし川伴勢度う吉原鶴仙
 道下手折結う遊言の御小、柳高

作句そ外折連うり貝控死、夕樂
 池乃花屠海う小節うれ、如松
 送あももや指ある名多菜ハ、五禽
 経車や新のまう如干支紫松信連三坐月
 旅うら乃友信とや春うさみ、心月
 又枕う好他の意う去思うれ、心翠
 引舟う掌れう扇う柳、茶、時笑
 雲乃衣乃袖うあう梅の毛、字愛

老庄新言遠ふきこむ母法うま後乃
 俗説とまふせしむ物この
 ち都と寝して

老庄新言遠ふきこむ母法うま後乃
 俗説とまふせしむ物この
 ち都と寝して

老庄新言遠ふきこむ母法うま後乃
 俗説とまふせしむ物この
 ち都と寝して

老庄新言遠ふきこむ母法うま後乃
 俗説とまふせしむ物この
 ち都と寝して

老庄新言遠ふきこむ母法うま後乃
 俗説とまふせしむ物この
 ち都と寝して

あつらひ抜ふる 宿るれあこれ 寒葉舎 壺友

鶯の心この中野と交りて 鳥巢舎

ふたり又歳暮と松のぬい 素紙坊

例年おぼろく秋の心人あ

手紙よおの造作二品と信りて

年終よころもつ和や竹葉抄 凡月高 枕後

冬意候のちむらり雪牙

と乃薩とけくあかり 二見菴 旭松
歳終と絶たれ音や松乃清 宿毛東福寺主 眠子
鶯の志をうき心そ花の音 備後多田 發愛坊
云竹乃花や四方ふゆき 八野 二僊
月と友和乃紫と松乃ぬい 須崎 青字

和詩 戸波 洒羅

世を度く人因む家やる
福壽のちきり多き海山

三子了庵と又巻色

子と勢とこの道の月花

むまゝに十寸栴の香るるれ 安喜 樂之

あゝあゝく哉をせよやその奴 安田 吐缸

此外自他邦乃諸君子傳く所の書画詩歌俳

茶藁磁器乃類ありあり就中黄薇の後りる

笠井定重まゝとて其藩の事可言等淺し

かそれと本邦より受ふ所す皆帖々家世に

半能多中此身を却り茶汁のくま

あゝはこゝに居るを成めり諸君子の

厚情ゆりるを成めりてはく事謝る

とてあはれと云ふ

活とやむあまき今り 松清乃 穢心

父を居る成りよ初めりて

志はる吉書と評して

意利節後をよやまのそけり 男 徠山

笑書とこめく 秋柳 程ひまり 女 佳宅

家見は年順と保身

大姉のゆたのせ板志がまひふ 才 榮石

四季混出

夏多や涼とけくあき 秋下 天高生 暮家
 杉氣了葉表ふし 月 勸学院 律師 松窓
 名月や涼気あき 月 藩中 集和
 心と抱え老とまねく 竹夫人、 醉榮
 虹の橋乃あき 月 藩中 池月
 柳多や晴了あき 月 藩中 不石
 秋の心 秋多 月 藩中 莫鷹

うはくーや結凡のあめ社のめ、三選
 踏ん、落葉の中や矢一筋、素水
 雨この森くると合内乃ちあけ、後洞
 小春えくき方あききや障子紙、半閑
 物さびきのねんふきや書、声蛙
 ぬり〜お遊ひう交るあられ、次蛙
 ち〜うぬ〜柳の糸やぶつ了、
 蓬萊や勇士はうま乃山、
 城鄭南西十六鳥水、
 洒素

葉うら〜あめおあもあ〜り、
 戸ひれを葉のび白あふ家くれ、
 泥糸の指と執りり春の雨、
 首の葉おあを表了秋うけあ〜り、
 初り降〜了〜ま宵や波のき、
 夕よ〜く〜あ〜れ〜く〜度〜る〜志〜解〜か、
 へ〜る〜あ〜の〜あ〜の〜あ〜る〜う〜野〜り〜公、
 厩出き了蒸気をか〜く〜歸〜川、
 其少、
 言外、
 城東、
 葉急、
 花園、
 名橋、
 里扇、
 梅枝、
 涇水

五粒や小百ふくく新月の如、
 沙川乃かあふくくきき月如、
 去佛り好きおのまをや春の酒、
 六月や好きあふくくかたれ位、
 神祇あふくとおれく花見えれ、
 小好えくお孫あつる巨魁は、
 ふ好えく延んん流よの常系、
 或秋もふ易の巻や松乃葉、

鳳溟
 如水
 三者
 利兆
 支撰
 熊山
 里遊
 陶白
 竹霞

名月と佳おきくく東又れ
 納飛や脯乃芭新梅白きあり、
 葉新まじや昔打替る二葉弱、
 雲くく今もこれい束や小塩山、
 十六粒此雲人をもくくいなきれ、
 山松乃流や町南くく云能松、
 従前やこりも事ぬ竹のま、
 嬉しさい年ひまけて初作集、

貞甫
 伊野
 吳仙
 漢隣
 徐颺
 醒石
 月池
 清暖
 松和

猿高岡之袖乃む高岡見る男小
 素月三 素月
 漏る波心好も又中月波 陽谷
 桂竹好えさる雨峰山桂家、羽白
 文盲好手柄る子一初茄子、知足
 学や授く世をさるるそわそわ、一雨
 新くれあうきそと小負小、一運
 雲霧中しる雲さる中も亦、只隠

垣火ときもさるありあまの言左河藩 避翠
 晴院の石く霞つく生をくれ、素兄
 考の白松と乃あるとそあうり、無古
 雨ふ集りて稀お永一京泊り、尾白坊
 う勢止んであをさるるあうれさる久礼 守拙
 晴臺より氣自小や汐千倍、有隣
 川より好一口う思ひ膚う水、松宇
 依保川や子箱乃布う夏の月、不及

徳もきやぢふくゆ乃後るる、市浩
梅とを筑つてささるる、水也
ささるるのささるるの家、れ、帯河
次よおのほり咲きり梅、七加江甫夕
去年一々如昔、信が弟門を他、柿山荷友
酒のほり酒つてささるる、桂聲
一系おのほりや筆一のりせ、酒賦
ささるるに二夜の思わ、こ流れ、校風

道のささるるを知らぬ、校館
旅引乃事々々、旅と極むる、竹露
おそるる、鞍馬のたぐや花さる、久保川清里
ささるる、傳と極や、あ居、三貫三
ささるる、ささるる、梅乃、入野一貫
土踏ぬ身あも、送や、ささるる、和友
稽考のや、雲乃、懐く、おさるる、盧岳
おさるる、和や、島と、ささるる、雨乃、考、如、樵

ぼく〜う〜風のそほやまらる、
 白
 あり魚とせし〜
 此君
 村〜
 魯三
 小雨や〜
 左岳
 楯大禁く家や〜
 松園
 船長結家〜
 可憐
 水唐乃月〜
 映雲
 海際の心〜
 其濤

青らりを〜
 李翠
 宵月の〜
 李橋
 か〜
 芦菔
 未〜
 耕雨
 松〜
 孤山
 寺〜
 其薰
 舟〜
 輕舟
 天乃〜
 葭水

十六夜おいとく云留お片り
 浮舟や掬う清みの生るる
 考りてそと糸のふけ吹あう
 夕立やあぬれりあふ月
 咲くもて小村めくく
 町由ゆく雲をあらく月車外
 さいきいれき花やさ乃さう
 去る雲おれぬわうり小
 雨
 固梁 澄江 澤水 和泊 翠波 茅根 翠波 卵鷺

疲柳にお免さるる色や番柳
 廉乃庵おるの星心と散れり
 露一糸と魚清り竹の影
 秋の色やほしく生りく夫
 柳咲く機音 舞ふ立所
 是のうれ果ておる喜の宵
 栞る中やゆらふ花の影
 きぬくお早の別道や
 旭山 益三 魯郷 如水 一笑 可樂 栞枝 芦舟

大段より乃乃更り一枯中家、喜耕
 色付く姉妹おもや青鬼灯、月窟
 さゆひは夜宮より一市三貫
 さゆひは夜宮の栄や松の花、市隠
 中よりあゆむるうわ刺、熱、東澁
 泊竹を價のあや信生安、和圓
 吹ぬぬはと紙の物のおん、茂竹
 探云了むはくや負角力西野地延志

あややあや正月七法やう、
 抱一子の乳房斜しく産うれ、野田可然
 壁の上より空深くく終の行、赤岡龍二
 喜みあ待合せしをなれり、赤岡樊外
 白魚のころれききき一巻所、南洋
 かな花のあななふのせし一董うね、柳雨
 冠乃好むく小和やむし一合、知足
 人あたまあやむるを誅れ、百畝

舟中の中や大と折し船の者
 其友
 行路や不考結みき風乃音
 琴松
 致一足りきまじりや弘生 友
 英二

徑田乃和と竹庵ととあ

諸君子の金玉

その骨きりきりさきさきの新未作
 出雲 楚白坊
 おもひの柳あけけり 美濃 友和坊
 名月やうらとをまじり 雷の松 越后 茶静
 さるる竹の葉く梅乃きりきり 美濃 其樂坊
 大なる心んみりとあけけり 美濃 喜樂坊
 月さゆきさの岬や木の芽時 宗樹坊

子規啼や門田の多ゆり 石見 鷺友
 皇都の歌く吉向やの夜中 阿波 其雪
 寄るうり字田乃松糸佛一崎 一 寄由
 舞山崎うり赤次の清笠花きう 一 吳山
 日の輝うりやちの儘ぬ田深うれ 一 柳坡
 ぬきやと降やよむ乃むぢぢ 一 夢外
 木はうりさのきうき出 一 其雀
 永さりの中うき 美濃 如笠

貴なきる房の鳥やまくの冠 出雲 其嶺
 又換るもよれ 越后 翠雨
 馬次小房 備前 月前
 蛙信うり 周防 里桂坊
 唐うり 魚松齋師

文通

乞食より筆を絶す、葉山子外翁 兔鳥伍

月を峰へ湖あり野のありは、醒こ

坊後よりなすてや、庭のあはら戸 古遊坊

海ふ乃をよそはし、年一の市、文字菴

貸す、兼く本居の志や、まゝの雨、菴 桂下坊

雨や、らんをの老松を、よそひるめ、甲斐 空樂坊

言く、く富士と、や、初り、兼、相摸 一扇

物、や、高き、後を、西子、波乃、音、越后 泰志

まゝの音、おひあ、く、降、ま、り、三 孟多為坊

雪、や、初、ま、り、雪、ま、り、四、の、月、三 月湖

松、の、勢、の、音、を、初、り、初、ま、り、の、峰、越前 鷺汀

雨、一、口、二、口、く、さ、め、り、兼、徒、越前 伸也

さ、り、れ、や、え、お、兼、兼、一、道、り、庭、美作 其、眺

日、わ、り、や、兼、り、兼、り、田、井、れ、あ、美作 鬼馬

ふ、さ、く、く、む、り、ふ、り、兼、り、兼、り、美作 琴、松

月、く、兼、り、兼、り、梅、の、白、ひ、り、り、美作 年、花

兼尾張、蜀阜
 陽夫と彦と申れどや沖お石美濃、花賞
 月より新里も習うぬ穢うれ、墨川
 踊り子う懐い顔あし一五子、石芝
 幸心とくくくくくくや残るる、花曉
 飛や海見えぬりせぬ性うれ、精陵
 昔も麦や志城之弘うぬ海の色、公忠
 更におぬと申れと撰うるる、伊勢
 更におぬと申れと撰うるる、里曉

窓のく琵琶強く人や籠り、播磨、琴吹
 二軒うく梅無きうく小ぬり、金花
 わるきさうしてさあある田植ぬ、備前、馬佛
 肉ふく破れぬあや苗代、田、雲州、固有
 菊苗やうらうらう色乃極紙り、兎溪
 帆きうく入る港をぬのく夕暮、一甫
 霞つれ多却云紫の聲、鯛小、汀柳
 老も出てきうくうくうの美草か、麻嶺

新下^{長川}こほく^{雲鯨}夏乃をうけ
 如所橋橋子日あり^{登鯉}春の川、
 夷言やか^{周防}習熟^{紀伊}作う^今了ら^是之
 之のう^{讚列}深地^恭むし^舎し^茶を^舎ぬ^舎ぬ^舎
 照^{阿列}控く^寄雲う^潤入^潤る^潤一^潤梅^潤白^潤の^潤月^潤
 新く^潤み^潤る^潤志^潤の^潤一^潤と^潤快^潤く^潤作^潤る^潤ぬ^潤
 秋^潤志^潤く^潤く^潤強^潤く^潤ぬ^潤く^潤や^潤角^潤力^潤ぬ^潤、
 栢^潤茂^潤

硯を土石の朽る^潤網^潤う^潤く^潤う^潤四^潤乃^潤
 韃^潤林^潤驚^潤ゆ^潤を^潤兄^潤こと^潤く^潤ま^潤る^潤磨^潤の^潤
 能^潤健^潤り^潤我^潤十^潤之^潤う^潤と^潤か^潤き^潤く^潤る^潤
 法^潤他^潤子^潤の^潤夜^潤夢^潤を^潤揮^潤也^潤
 予^潤も^潤机^潤の^潤尾^潤馬^潤を^潤弄^潤る^潤

燈^潤の^潤聲^潤やか^潤か^潤る^潤

一^潤字^潤く^潤あ^潤や^潤く^潤ん^潤

魯^潤松^潤菴^潤

唯口共物

1. 唯口共物

唯口共物

唯口共物

唯口共物

唯口共物

唯口共物

唯口共物

蕉門書林

皇都寺剛通三條

橋屋治兵衛梓

